

5. 各種プロジェクト

小平国際学生宿舎及び国立国際交流会館では、多様な寮生をサポートするために多くの学生アシスタントが寮運営に携わっている。小平国際学生宿舎には執行部チームであるレジデント・アシスタント(RA)35名と共用ユニットの居住者間交流の橋渡しを担うコミュニティ・アシスタント(CA)19名、また国立国際交流会館のRA5名が常駐している。彼らを現場指導するスーパーバイザーとして、留学生・海外留学相談部門の教職員が各宿舎での現場指導にあっている。

1. 2017 学寮交流会 HOUSE 会議

小平国際学生宿舎では、4大学(一橋大学、東京学芸大学、東京農工大学、電気通信大学)の関連部署、国際学生宿舎専門委員会構成員、宿舎アドバイザー、管理会社、各学生寮委員会など、複数の寮関連組織が入退寮管理業務及び寮生指導・教育・サポートを行うという複雑な構造になっており、組織を超えての情報交換や打合せを頻繁に行う必要がある。本年度の新たな取り組みとして、2017年10月28日(金)に小平国際学生宿舎において、大学生教育のための学生寮関係者会議(以下、HOUSE会議)を開催した。“HOUSE”とはHousing Officers for University Student Educationの略であり、学生寮に携わる大学教職員や学生スタッフが各々の学生宿舎の取り組みや構想について意見交換を行い、各自の教育寮運営に役立つ情報交換を目的とした会議として位置付けた。また学生寮に携わる現場担当者同士のネットワークを築き、大学における今後の教育寮の在り方についての対話を維持するための土台を構築する事を目的とした。当日の参加者は全体を通して約75名で、約20教育機関の担当者・学生スタッフが参加した。

1.1 HOUSE 会議開催の背景

今回のHOUSE会議開催の経緯は2014年に遡る。当時お茶の水女子大学SCC寮の担当をしていた北澤泰子氏と学生スタッフがISDAKを見学し、阿部エグザクティブアドバイザーと宿舎運営についての意見交換を行った。2015年には、お茶の水女子大学SCC寮にISDAKのレジデント・アシスタントと教職員が招待され、寮見学や寮内でのイベントに参加し、学生スタッフ同士の交流を行った。2016年9月には、北澤氏のコーディネートにより「学生寮交流会」が開催され、4大学(麗澤大学・中央大学・お茶の水女子大学・ISDAK)のRAと教職員が参加した。交流会の中では、各寮の概要や取り組みの紹介を行い、学寮関係者の横の繋がり構築を進めた。以前から行われていたこれらの取り組みに加え、近年注目を集める国際宿舎の運営について、改めて情報交換を行い、問題解決に繋がる意見交換やネットワークづくりを念頭に、

2017年のHOUSE会議は開催された。

1.2 HOUSE 会議の実施概要

第1回HOUSE会議は2つの部から成り、第一部では宿舍見学とグループワークを通じた意見交換、第二部では情報交換会を開催した。スケジュールは表1の通り。

表1 HOUSE 会議 スケジュール

【第一部】 宿舍見学と意見交換会	
13:45 - 14:00	受付
14:00 - 14:10	はじめの挨拶
14:10 - 14:30	アイスブレイク・小平宿舍概要
14:30 - 15:15	国際学生宿舍見学
小休憩	
15:15 - 17:25	テーマ別: グッドプラクティスの共有
テーマ① イベント	大学別事例発表→グループワーク【学生寮の未来にむけて】
テーマ② 快適な環境	大学別事例発表→グループワーク【学生寮の未来に向けて】
テーマ③ 教育	大学別事例発表→グループワーク【学生寮の未来にむけて】
移動	
【第二部】 情報交換会	
17:30 - 19:00	情報交換会

1.3 「参加型」グッドプラクティスの共有

第一部の後半は、代表大学による事例（グッドプラクティス）の発表と、全員参加のグループワークが行われた。事前調査を行い、大学や学生寮の規模別に、学生グループ（5）と教職員グループ（5）を振り分けた。グループはそれぞれ5人～8人ほどで構成され、各グループには一橋大学教職員やRAを必ず一人配置し、ファシリテーター役を担った。

グッドプラクティスの共有は3つのテーマに分けられ、テーマ①のイベントについては、ISDAKによる「ウェルカムパーティーとMusic Partyについて」と、名古屋大学から「防災イベントの取り組みについて」の事例発表があった。テーマ②の快適な環境については、中央大学とISDAKよりそれぞれ「快適な生活空間の維持」について発表があった。最後のテーマ③の教育については、麗澤大学より「スタッフ教育」と、一橋大学国際交流会館より「ハラル教育」について具体的な内容の共有が行われた。

尚、グループワークという「参加型」アプローチを取り入れた背景には、学生寮に携わる学生スタッフや担当者には、常に「プロアクティブな姿勢」や「主体性」「協同」等が求められる事から、これを体現してもらうという目的のもとワークショップ形式を採用した。参加型の情報共有のセッションでは、学習目標を次の3つに絞り、ワークの設計を行った。具体的には、①教育寮に携わる関係者として、全員が学び教える立場で学生宿舎の取り組みを考える、②各自の現場に持ち帰って実践できるように、役立つヒントを「創造」する、③寮関係者による横のネットワークを作り、という3つに絞り、限られた時間内での対話の学習目標を明確にした。

グループワークについては、各グループで行う「共有型セッション」に加え、合同グループで行う「プロジェクト型セッション」を実施した。まず「共有型セッション」では、4つのステップを設けた。具体例を挙げると、一つ目のテーマのイベント作りについての ISDAK と名古屋大学の事例発表が最初の「Share」ステップとなり共有型セッションが始まる。次の「Respond」ステップでは事例を聞いて思った事・感じたことを書き出し、「Categorize」ステップでは規模やテーマ別にグループ分けを行いながら、意見交換をする。最後の「Switch」ステップでは、グループメンバーの2人が2方向に移籍し、新しいメンバーを迎えた状態で次のテーマの事例発表を聞く。3つのテーマについて、このサイクルを繰り返す事で、多彩な意見の交換を図った。

次に「プロジェクト型セッション」では、各グループに架空の大学の規模とテーマをお題として提供し(例 大規模宿舎 スタッフ教育)、実現したいと思うプロジェクトを発案・計画案の作成「Discuss & Plan」を行った。プロジェクトそのものは、共有型セッションを経て出たアイデアでも、全く新しいものでも良いとし、既存の枠にとらわれない考え方を促す仕掛けとした。次に、今まで別々にワークを行っていた教職員グループと学生グループが合体し、お互いのプロジェクト案を共有し、合同グループ内でのベストプランを改めて練り直す「Present & Collaborate」というワークを行った。当初の予定では、この二つのステップで終了し、懇親会会場でベストプロジェクトへの投票のみを行う予定だったが、最後に合体グループからのプレゼン時間を設けた。その結果、非常に内容の濃いプロジェクトが発表され、特に学習目標②である「役立つヒントを創造する」を体現してもらうことができたと考える。尚、合体グループによるプロジェクト案の詳細は、添付の報告書にまとめた。

1.4 参加者の声

HOUSE 会議の事後アンケートでは、様々な意見が集められた。参加者自身の中でも一番の気づきについては、「驚きと共感」の声が多かった。例えば、“どの学生寮も抱えている課題・悩み(特にソフト面)が似ている”、“寮の規模は異なっても問題は同じ”という意見が多かった。他にも、“学生力のすばらしさ”、“多様な RA の役割

がある”という意見もあり、様々な事例共有や発表を通して、RAの主体性を評価する声が多く挙がった。尚、前述の驚きと共感にも繋がるものだが、“情報を共有すれば、解決策のヒントに繋がる”、“他大学との対話の重要性”等、寮関係者同士の情報共有の機会が、現状としてあまり存在していないことも分かり、問題解決には横の繋がりを構築し、情報交換や対話・協同が必要であるという気づきが参加者の中にも生まれていた。

1.5 HOUSE 会議の今後の展望

今回開催した学生寮関係者会議「2017 HOUSE 会議」では、国立・私立大学の寮担当者・研究者をはじめ、多くの学生スタッフも各地から参加した。宿舎見学や情報交換会に加え、発展的な対話を目的とした会議の開催に、正直驚きの声もあったが、参加者の多くは協同的なアプローチを有効だと感じ、次回のHOUSE 会議の参加を希望する多くの声があがった。今後は年1回を目途にHOUSE 会議を開催していく予定であり、メーリングリストやフェイスブックページを設置・活用する。

2020年を目標に留学生30万人の受け入れ計画が進む中、増加する学生を受け入れる国内の大学にとっては、国際宿舎は大きな課題である。よって民間企業にその運用を委託するというケースも多くみられる。しかし、日本の将来を担うグローバル人材の育成を期待されている教育機関からすれば、大学が保有する国際宿舎というのは本来可能性溢れる教育の場でもある。教育寮としての宿舎の在り方や、RAの存在意義、そして高等教育の国際化につながる学びの場としての国際宿舎の取り組みについて、今後も注目していきたい。

(植松 希世子)

2. 派遣留学後のフィードバックセッション

2-1 実施の背景・目的

2017年11月29日(水)の3限に、派遣留学参加者に対するフィードバックセッションを実施した。背景としては、派遣留学参加者に対して、2016年度から行動特性診断を留学の前後に実施するようになっているが、その留学前後のスコアの変化を元に、留学経験を学びの機会に役立ててもらおうということが挙げられる。フィードバックセッションの学習目的は留学前後の行動特性診断の変化を元に留学経験を振り返り、参加者同士のディスカッションを通じて、自己理解を深めてもらうとともに、将来の目標を立てるのに役立ててもらおうことであった。加えて、主催者側の開催目的は留学前後での行動特性診断に変化が見られる場合についてそのスコア変化の基となる経験に関するデータを蓄積することにあった。

2-2 実施内容

2016年の夏出発の学生を対象として、電子メールにて開催案内と参加募集を行ったところ、5名の学生から参加希望があり、当日には4名の学生の参加があった。タイムラインについては、以下の通りである(表2)。

表2 フィードバックセッション スケジュール

12:45	<ul style="list-style-type: none"> ● 軽食・飲み物を用意し、参加者とスタッフで机を囲み歓談
13:15 (30分)	留学経験の振り返り <ul style="list-style-type: none"> ● 参加者の自己紹介 ● Academic (授業や学習環境) について ● Daily Life (日常の生活) について ● Relationship (交友、人間関係) について
13:45 (20分)	帰国後行動診断特性レポートの解説 <ul style="list-style-type: none"> ● 概念、コンピテンシーと行動特性のリフレッシュ ● 変化の大きかった行動特性についての確認と解説 ● 変化の大きかった能力についての確認と解説
14:05 (15分)	留学の体験を成長につなげる <ul style="list-style-type: none"> ● コミュニケーション力におけるコンピテンシーの変化と行動特性の変化例示 ● シート記入 ● シェアリング

14:20 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ● 問題解決力、グローバルマインド、留学先での学習行動におけるコンピテンシーの変化と行動特性の変化についてシート記入 ● シェアリング（問題解決、グローバルマインド、留学先での学習行動）
14:50 (15分)	留学とキャリア形成：行動特性の視点から <ul style="list-style-type: none"> ● 解説とフィードバック
15:05 (25分)	クロージング

2-3 実施結果

対象学生が留学前に受験した行動特性診断では、4つのグローバル力(コミュニケーション力・問題解決力・グローバルマインド・留学先での学習行動)のうち、コミュニケーション力が一番低かったため、渡航前オリエンテーションではコミュニケーション力の6コンピテンシー(傾聴力・共感力・受容力・自己開示力・主張力・プレゼンテーション力)のうちの一つの能力に焦点を当て、留学前と留学中にどのようにその能力を高めるかについての目標を設定してもらったという経緯について説明があった。フィードバックセッションの参加学生に対して、この渡航前オリエンテーションで自らが設定した行動目標を留学中に意識していたか聞いたところ、あまり意識していなかったと答えた学生がほとんどを占めた。コンピテンシーの向上のためには、留学中にその目標を意識してもらうことが重要であると考えているため、次回以降は、渡航前に学生が設定した目標を、留学中も継続して意識してもらうための仕組みが必要である。

次に、留学経験者に対して、留学経験の振り返りとして、授業や学習環境、日常生活、交友・人間関係の3つの側面について、4つのグローバル力(コミュニケーション力、問題解決力、グローバルマインド、留学先での学習行動)をどのように変えようとしたか、どのようなハードルに遭遇したか、具体的にどんなことに挑戦したかを対話形式で報告してもらった(例：フランスに留学した学生は、授業中に発言しないと成績に反映されてしまうため、意識的に発言をするようにした)。

さらに、配布された行動特性診断の留学前後のテスト結果を踏まえ、参加者は4つのグローバル力(コミュニケーション力、問題解決力、グローバルマインド、留学先での学習行動)ごとに変化があったコンピテンシー(プラスの変化、またはマイナスの変化)について、どのような行動特性の変化が影響を与えたのか考察し発表した。最後に、行動特性診断結果を活かしたキャリア形成について、自分を活かせる(コンピテンシーを発揮できる)職種について行動特性研究所講師より解説があった。ビジネスで求められるコンピテンシーには、共通・基礎コンピテンシーと専門コンピテンシーがあり、その両方のコンピテンシーを高めていく必要がある。専門コンピテンシーの例として、教育福祉では深い共感、傾聴力、質問力、観察力などが挙げられておりこれらのコンピテンシーを育てるた

めには、留学後も意識して自らの行動特性を変化させるアプローチが有用であることを説明した。

2-4 今後の展望

フィードバックセッションは、今回初めての開催となったが、まず大きな課題としては、対象学生の人数に対して、実際の参加者が少なかったことである。最大30名程度の参加を見込んでいたが、参加者は4名だった。原因のひとつとして、フィードバックの実施が留学終了時期(2017年1月～8月)から時間が経過していることが挙げられる。次回以降、留学のモメンタムが残っている6月ごろに実施することを検討したい。

さらに、2016年の夏出発の学生については、渡航前オリエンテーションで設定した行動目標をmanabaで提出させておらず、渡航前オリエンテーション終了後に行動目標を確認する手立てがなかったため、参加学生がそれを意識せずに留学期間を送ったことにつながったのではないかと考えられる。これ以降の2016年の冬出発の学生から、渡航前オリエンテーションで立てた留学中の行動目標をmanabaで入力させることとし、学生自身がいつでも振り返ることができるようにしたため、留学中に行動目標を意識しやすくなったのではないかと推察する。このため、次回以降のフィードバックセッションでは、渡航前オリエンテーションが留学中の意識や行動の変化を促したのかどうか、介入の結果による行動特性の変化との関連についても注視していきたいと考えている。

また、学生に留学経験と行動特性に関する発言を求めた際に、話が発散していく傾向があったため、コンピテンシーと関連した行動特性についての、留学中の具体的なエピソードについて絞って語ってもらうためには、今後、質問項目を工夫する必要がある。

以上に述べたように、色々な課題が浮かび上がってきたが、フィードバックセッションに参加した学生は、留学経験を他の留学帰国者とともに振り返ることによって、自己理解を深め、将来の計画を立てる上で役に立ったのではないかとと思われる。次回はさらに多くの学生に参加してもらい、より有意義なセッションにしていけたらと考えている。

(新見 有紀子)

3. 「北米在住外国学校出身者・海外教育経験者の日本進学に関する動向」研究会

3-1 実施の背景・目的

海外在住の日本人人口が増加する中、センサス（アメリカ国勢調査）によるとアメリカ在住の日本人人口は80万人に達している。また現地生まれの日本人の18歳人口は毎年1万人を超えると推測され、西海岸を中心に増加傾向にある。彼ら「新二世」の多くは日本や日本文化に強い興味を持ち、英語を母語としながら日本語力も有するため、グローバル化を進める日本の大学にとっては親和性の高いターゲット層といえる。近年は、米国大学の学費の高騰や若年層の失業率の高さを背景に、日本の大学に進学を希望する「新二世」人口が増加傾向にある。そこで「新二世」の大学進学を支援している教育コンサルタントや新二世として日本の大学に在籍している学生を招待し、外国学校出身者・海外教育経験者の日本大学進学時における課題を共有することを目的として、本研究会を開催した。

3-2 実施内容

研究会は2018年1月25日（水）に行った。参加者は34名で、過半数がスーパーグローバル大学の教職員が中心であった。スケジュールは以下の通りである(表3)。

表3 研究会スケジュール

13:30	受付
14:00	開会 挨拶 文部科学省 高等教育局 学生・留学生課 小形 徳応 氏
14:10	第一部 基調講演 「北米新二世市場のポテンシャルについて」 MACS Career & Education 代表 原田 誠 氏
15:00	第二部 調査報告 「北米における日本大学進学者の動向：保護者/生徒のアンケート調査」 司会： 国際教育センター 阿部 仁 コメンテーター： Lighthouse 代表 込山 洋一 氏
16:00	第三部 外国学校出身者・海外教育経験者のパネル ディスカッション 「日本の大学への進学と課題」 司会： 国際教育センター 阿部 仁
17:00	閉会

第一部の基調講演では、北米における日系「新二世」の市場の概要や日米大学の入学審査の違いを学び、世界中の大学との獲得競争という観点から日本の大学における入試制度の柔軟性を高めることが指摘された。また情報公開においては各大学が自らの特色を前面に打ち出し、各大学のニーズに合った「新二世」にターゲットを絞ってアプローチするマーケティングの必要性が指摘された。さらに、現時点では「新二世」市場の実態を把握するための客観的なデータに不足しており、この人口に効率よくアクセスするためには官学協働で「新二世」を日本の高等教育やキャリアパスに取り込む仕組みづくりの必要性が示された。

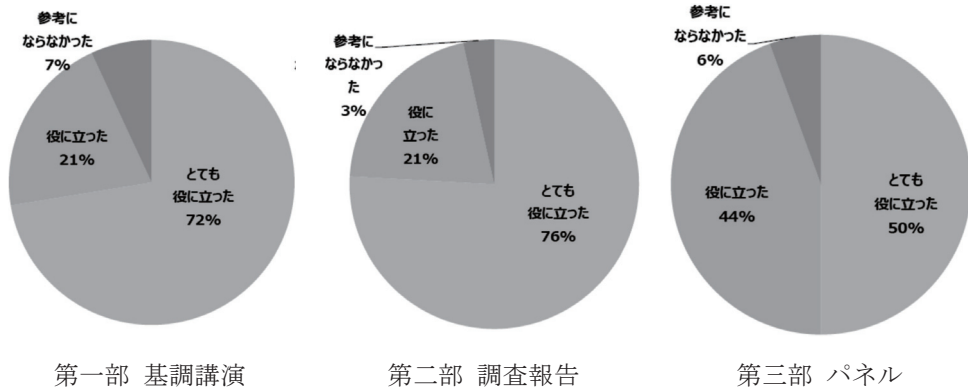
第二部の調査報告ではよりターゲットを絞り、北米在住で日本大学進学に関心の高い保護者や学生から収集したデータをもとに、「新二世」が日本進学を意思決定する際に重要となる要因を分析した。「新二世」の大学進学に関する意思決定においては、アンケート回答者の8割以上において保護者の影響が大きいと回答した。日本進学に有利に働いた要因としては、子息の日本に対する思いや経済性(学費の安さ)が挙げられた。一方で米国大学進学に有利に働いた要因としては、将来性(活躍の機会)や暮らしやすさ(習慣、文化)があり、意思決定の複雑さが浮き彫りとなった。また、昨今日本の大学においては受験を前提とした入学審査に加え、書類審査をベースとした入学審査が増えているが、複雑化する入学審査プロセスを理解するための情報が海外在住者にとって不足していることが指摘された。

第三部のパネル・ディスカッションでは慶應義塾大学学部2年生(米国出身・男)、国際基督教大学学部3年生(米国出身・女)、一橋大学学部4年生(日本出身、英国長期滞在者・女)の3名に、日本進学のきっかけや進路決定のプロセス、大学情報の収集方法、入学準備のプロセス、日本の大学における環境適応について経験したことをもとに、日本の高等教育が「新二世」をさらに獲得していくために整備すべき課題点を模索した。第二部のアンケート調査結果同様、パネリストからは保護者の影響、経済性、入試制度の柔軟性、各大学の特色が日本進学の手決め手であったことが共有された。

3-3 実施結果

研究会参加者のうち有効回答者 29 名の各テーマに対する評価は以下の通りである(図 1)。

図 1. 参加者アンケートの結果



研究会での情報共有が有用と感じた参加者が9割以上を占めており、研究会全体として有益な情報共有が図れたと思われる。参加者の中には「世界的には短期プログラムでの交換が主流になりつつある中で「学部で」「文系で」「4年間」の進学を真剣に考えてくれる新二世はとても貴重なマーケットだと思う」、「今まではアジアを中心に、国内・海外で行われる留学フェアに出展してきたが、これからは英語圏を中心にして留学フェアや学校訪問など積極的に参加しようと思う」、「日本の大学が外に向かって何をPRすべきか、とてもに参考になった」といったコメントを寄せたものもあり、「知られざるグローバル人材市場」に一定の照準を当てることができたものと思われる。

3-4 今後の展望

日本の大学における正規留学生のリクルートはアジア地域が中心であったが、英語のみで学士過程を修了できるカリキュラムを設立する大学が増加する中、英語で学ぶ学生の獲得には新たな戦略が求められている。国内・海外で行われる留学フェアはアジア中心に開催されているが、今後は英語圏への留学フェアや学校訪問なども必要となってくるであろう。アンケート回答者の 48%が交換留学生の獲得に積極的であると回答したのに対し、学部正規留学生の獲得には 25%が積極的と回答しており、特に英語圏の正規留学生のリクルートは発展途上にある。引き続き今回のような研究会を開催し、日本語を勉強する米国人や英国人学生のみならず大学全体北米における日系の「新二世」といった正規留学生の市場開拓に必要な戦略を、グローバル人材獲得に積極的な大学同士で協力し確立していきたい。

(阿部 仁)